

No.2721

『海峡植民地ペナンの華人と政治参加』出版企画

北九州市立大学外国語学部 准教授

篠崎 香織

本活動のもとで代表者は、2007年に提出した博士論文を大幅に加筆・修正し、『プラナカンの誕生——海峡植民地ペナンの華人と政治参加』を2017年9月に九州大学出版会より出版した。

本書は、20世紀初頭に海峡植民地ペナンを生活や事業の拠点とした華人について、1881年に設立された華人公会堂（Chinese Town Hall/平章公館）と、1903年に設立されたペナン華人商業会議所（Penang Chinese Chamber of Commerce/檳城華人商務局）を中心に、出自国（中国）と居住国（海峡植民地ペナン）双方における政治参加を論じた。本書で扱う時期は、ペナンの華人が主に関わる二つの地域——東南アジアと中国——における秩序の転換期に当たった。この時期に東南アジアでは、スエズ運河の開通や通信・運輸技術の進展により、植民地と宗主国との距離が縮まり、植民地国家における行政の合理化・集権化が本格化し、植民地の住民たちに対する植民地国家の干渉が増大した。ペナンにはイギリスの直轄領としての秩序が構築された。中国では、アヘン戦争の敗北に伴う開国を一つの契機として中華世界の秩序が大きく変容し、清朝の統治基盤が動揺し、辛亥革命を経て中華民国が設立された。本書は、自らが関わる複数の世界の秩序が大きく転換するなかで、越境を生きるために自ら望ましい秩序を構築すべく、出自国においても居住国においても社会の正当な構成要員として認知を得ることに努め、積極的に政治に参加したペナンの華人に光を当てた。

東南アジア華僑華人研究では、出自国から居住国への帰属意識の転換、すなわち「華僑から華人へ」という視点が共有されてきた。本書は、この視点がもつ課題として、①一元的にとらえられるアイデンティティ、②1人の個人に1つの国籍、③常に中国との関係で規定される華人性、④固定化される華僑イメージの4点を指摘し、「華僑から華人へ」という視点到縛られず東南アジアの華人をとらえる視点を提供した。